小田実全集〔小説　第18巻〕

風河

目　次

風河
「風河」にかかわって

風河

白いものが眼のまえでぐるりと動いた。

そこで千登世の記憶はとぎれている。わずかな長さの記憶だ。始まったかと思うと、古い映画のフィルムが途中で切れたように突然プツリと切れて終る。それからは、風だ。風は轟々とまわりの家をゆるがせて吹いた。家ばかりではない。家の下で地面がゆらいだ。

一

「チイちゃんはどこから来はったんや」と訊かれると、千登世はいつでも「天王寺はんの亀の池からやで」とおねえさんの真似をして口をとがらせながら、精いっぱいおませな顔をして答えた。千登世のそんな表情を面白がって、みんなは千登世の顔を見るとよく訊ねた。

「天王寺はんの池のそばでおかあはんに拾われなはったんか。」

「ちがいますねん。亀の池から、うち、自分でゲンセイに出て来ましてん。そこからひとりでこのうちまで歩いて来ましてん。」

ゲンセイというようなむつかしいことばを千登世が使ったのは、おばあちゃんが天王寺はん――みんながそう言って、千登世もその名でおぼえている四天王寺の亀の池は底がゲンセイからゴクラクに通じている池で、そこから千登世が出て来たのだと、口癖のように言っていたからだ。

「そんならうちはもとはゴクラクにいたんかいな」と千登世が訊ね返すと、「そうやで、チイちゃんはもとはゴクラクに住んでいはったんや。ゴクラクから、ある日、このゲンセイにひとりで出て来はったんや」とおばあちゃんはいつも、いつにない生真面目な顔で答えた。ゲンセイの代りに大阪と言うときもあった。

「ゴクラクから、ある日、この大阪にひとりで出て来はったんや。」

「ほたら、ゲンセイは大阪か。」
おねえさんの真似をしたおませな顔で、千登世はおばあちゃんに言い返した。
「ほたら、大阪はゲンセイか。」
そう逆に言ってやるときもあった。
どちらの場合にも、おばあちゃんは生真面目な顔をつづけながら、ウンウンうなずいた。
「チイちゃんはむつかしいことばを知ってはりますな。」
千登世とおばあちゃんのやりとりを面白がって、みんなは言った。
「うちはガクモンがありますからな。」
千登世は得意になっておませな口のきき方をつづけた。
ガクモンもゲンセイに劣らず言いにくいことばで、千登世はいつも舌を嚙みそうになった。そう懸命に言いながら、千登世は今わたしはおねえさんのように賢い顔をしているにちがいないと思っていた。おねえさんはヤクセンという女学校のもうひとつ上の学校に行ってむつかしいガクモンをしている。それはおかあさんが千登世に教えてくれていたことだったが、わたしだって大きくなったらヤクセンへ行って、おねえさんのようにガクモンするのだと千登世はよく思った。そう思うだけで千登世の気持はたかぶって来て、いっときおねえさんになったような気になった。
おねえさんは負けず嫌いの勝気なたちで、往来で近くの町工場帰りの若い男や道路工事の人夫が「ねえちゃん、べっぴんさんやな。どこぞへ遊びに連れて行ったろか」と声をかけて来たりすると、「何アホウなことをあんたは言うとるの。自分の顔見てから言うたらよろし。うちはな、遊びに行くんやっ

たら、あんたみたいな人に連れて行ってもらわん。ひとりで行く」と、いつものやさしいおねえさんに似ても似つかぬ声を出してやり返した。まるでその男たちめがけて球つきの球をあの長い棒で激しい勢いで突き出して行くみたいだった。電車道の球つき屋では、大人たちが長い棒で球を突き出して遊んでいるのが窓から見えたが、おねえさんはほんとうにそんな感じできついことばを口から次々にくり出した。そういうとき、おねえさんの顔は、おばあちゃんが連れて行ってくれる新世界の芝居であざやかにタンカを切ってみせる、若い男の役者の顔のようにキリリと引きしまって、とびきりきれいに見える。千登世は大きくなったらあんな顔になりたいといつも思っていた。

「なんで、亀の池からゲンセイに出て来はってから、よそへ行かんとこのうちまで歩いて来はったの。」

おねえさんはときどき訊ねた。

「ああ、それはな……」

とそんなとき千登世はきまっておばあちゃんの口真似をした。

「ここのうちのおかあはんがな、来なさいと言いはったからや。」

千登世はおねえさんの顔を見ながら言ったが、ほんとうに言いたいことはちがっていた。おねえさんが来なさいと言ったからだともうちょっとのところで言いかけて、いつも口ごもった。そう思うだけで何かひどく恥ずかしい気持がして来て、からだがいつのまにか熱くなっていた。

二

「そんならもとはおまえは亀さんやったんか」とそのあたりでいつも千登世をさえぎるのは、筋むか

いの荒物屋の息子で小学三年生になる正次だった。
「もとは亀さんやったのを、おまえんとこのインチキグスリで人間になったんか。」
「そうやで、うちのインチキグスリはよう効きますねん。」
インチキグスリの意味がよく判らぬままに千登世はやり返した。小さいくせに負けずぎらいで、おねえさんそっくりだとみんなに言われている千登世は、その意味を教えられたあとでも言い方を変えなかった。
「おまえはほんまにいけずな子やな」と正次は言ったが、千登世は平気だった。「そうやで。うちはほんまにいけずな子やで」と言い返した。「おまえ、よう言うな」と、いつか正次と同じ小学校で、正次より二年上級生になる千登世の兄の健太郎が横で見ていて呆れたように言った。そのときにも千登世は「そうですねん、うち、よう言いますねん」と健太郎にむかってキッパリ言い返した。
「あんたらもな、うちの店のインチキグスリのみはったらよろしいねん。あんたの寝小便かってピッタシとまるし、虫のほうもあんなセメン菓子なんかよりよう効きます。」
千登世はときどきことばをつづけてそこまで切り口上に言った。それもおねえさんがときに応じていけずにやってのけていたことだったが、そういう口調で言うとき、ことばのおしまいの「効きます」は「効きますウ」と尻上りに口から出た。「チイちゃん、そんなとこまでおねえさんの真似せんでええ。」おかあさんが笑いながら言った。「うち、おねえさんが好きやもん」と千登世は今度はおかあさんにむかって切り口上に言い返した。
「正次はんの虫な、うちのクスリ使えばええのに、荒物屋はんは西門までセメン菓子買いに行きはり

二

ますねん。」

おかあさんはよくそんなふうに怒ったように言った。荒物屋はんは正次のおかあさんのことだが、千登世も荒物屋はんはそんなところまでクスリを買いに行かないでうちで買えばよいと思っていた。千登世の家の一階はクスリ屋さんになっていて、道路に面した正面のたてつけのわるい、開け閉めするたびにきしんでいやな音をたてるガラス戸には「よくきくむしくだしあります」とおとうさんが自分で筆で書いた紙きれが「ねしょうべんによくきくくすりあります」と並べて貼りつけてあった。二枚ともにまるで正次のために貼ったみたいだと千登世は思っていたが、荒物屋はんがその二つのクスリのことで千登世の家のお店にやって来なかったのは、正次が恥ずかしがったからにちがいない。千登世はそう判断をつけていた。

セメン菓子は天王寺はんの西門のわきのセメン菓子屋で売っている虫下しのクスリだった。セメン菓子屋と言っても千登世の家のお店よりずっと大きくて立派なかまえのクスリ屋さんだったが、おかあさんもおばあちゃんもみんなが言うので健太郎も千登世もそう呼び慣らしていた。「天王寺はんのセメン菓子」で通るその虫下しのクスリは平べったい矩形のクスリで、まるで板チョコみたいだった。そんなふうに見えるのでお菓子と言うのだと健太郎がしたり顔に教えてくれていたが、色がおいしそうにつやつやと茶色に光るモリナガの板チョコとちがって、セメントそっくりの色をしたセメン菓子の板チョコは見るからにまずそうだった。「ほんまにうもないで」とはじめはセメン菓子のことを言われるのをいやがっていた正次もそのうち慣れっこになって自分からそんなふうに言っては、ポケットからセメント色の板チョコを取り出してパチンと割ってみせては、かけらを千登世の掌に渡したり

した。千登世の掌のなかで、セメン菓子のかけらはほんとうにセメントのかけらに見えた。

おねえさんの学校がそこでガクモンして、卒業するとヤクザイ師の免状をとれる学校だとは千登世はおかあさんから聞いていた。おとうさんは働きながらクガクしてヤクザイ師の免状をとってクスリ屋さんのお店を出したのだが、「じゃあ、おねえさんもヤクセン出はったら、お店しはるの」と千登世が当然のことのようにして訊ねると、おかあさんは慌ててかぶりをふった。「そんなことせんかて、おねえさんのおうちはお金持のええしのおうちやで、おねえさんの生まれはった姫路でもおねえさんのお店のこと言うたら、知りはらん人はいはらんのやで。そんなこと言うたら、チイちゃん、おねえさんのおうちの人に叱られまっせ」とまるでほんとうにおねえさんのおうちの人が立ち聴きしているみたいに声をひそめた。おねえさんのおとうさんができた人で、娘さんが結婚したあとご主人に不幸があってひとりで生きて行かなければならなくなったときの用意にと、三人いる娘さんに二人いるおねえさんのおねえさんは裁縫のほうのセンモン学校、おねえさんはヤクセンというふうにそれぞれ学校にやった。

「そやけど、ヤクセンはな……」とおかあさんは大事なつけ加えをするようにことばをつづけた。上の二人のおねえさんが行った裁縫の学校とちがって入るのに試験がむつかしい学校だ。「あそこはな、アタマがようないと入れませんのや」とおかあさんは自分の子供のことでもないのに自慢顔で言った。おねえさんのことを賞められると千登世はいつでもうれしい気持になる。その気持で「うちも大きなったらヤクセンに行きますねん」と大声でみんなに告げるように言った。

三

おねえさんは千登世の家の二階の物置きのように天井の低い四畳半を自分の部屋にしていた。毎朝七時におねえさんはそこからハシゴのように急な段バシゴを軽い足音をたてて降りて来ると、千登世の一家と下のお勝手口のそばの台所つづきの居間で朝食をいっしょにとった。柱時計がボン、ボンと勢いよく八時を打つとお勝手口から外に出て、往来をコツコツと小刻みに靴音をひびかせながら歩いて行った。黒いスーツの制服のスカートの下から伸びた黒い靴下に包まれた脚は、長くてかっこうがよかった。そのかっこうのよい脚が交互に活発に動いて、みるみるおねえさんのうしろ姿は市電の通る大通りのほうにむかって遠ざかって行った。そのおねえさんのうしろ姿が右に道が折れ曲ったところで消えるのを、いつも見とどけるようにしてお店のまえに立っておねえさんを見送ってから、千登世は幼稚園へ行った。

おねえさんは昔おとうさんが恩を受けた人のおじょうさんだった。どんな恩か千登世は知らなかったが、おとうさんはよく姫路のおねえさんのおうちの人には足をむけて寝られないと言っていた。おねえさんを引きとってあれこれ世話をしているのも、恩返ししているつもりなのにちがいない。ふだんは仲のよいおとうさんとおかあさんがときどき口争いをするのは、おかあさんが「そこまでやらんでも……」とおとうさんに言い出すときだ。そんなときには平素はおとなしくておかあさんの言うことに文句をつけたことのないおとうさんが、「わしらが今日あるのもあの人のご両親のおかげやで」とピシャリとおかあさんのことばを断ち切るように言った。そうおかあさんを叱りつけるおとうさん

は、千登世たち子供には決して見せたことのないきつい顔をした。

おねえさんの姫路のおうちは大きなクスリ屋さんだった。その話は千登世はおかあさんからもおねえさんからも聞いて知っていた。クスリ屋さんはクスリ屋さんだが、千登世の家のように小売りの小さなクスリ屋さんではなくて店員さんが何十人もいるという大きなクスリの問屋さんだった。そこで取り扱っているクスリの種類もちがって、おねえさんのおうちのクスリはカンポーのほうのクスリだ。寺田町のおばあちゃんの家へ行くとへんに苦いような匂いがするが、あれはおばあちゃんがときどき土瓶でぐつぐつ煮立てているカンポーのせんじグスリの匂いだと、健太郎が千登世に教えてくれていた。それで千登世もカンポーのクスリのことも知っているのだが、おねえさんがヤクセンで勉強しているのはそんな時代おくれのクスリのことではなくて、千登世の家のお店で売っているようなバイエルやタケチョウのクスリのことであることも知っていた。「何んでおばあちゃんがあんな古くさい効きもせんクスリつくってのみよるのか、おまえ知ってるか」と健太郎はお得意のわけ知り顔で言ってから、千登世の答を待たずに「あれはな、きっとおとうはんとおかあはんにあてつけとるんやで」とつづけていた。たしかにおとうさんとおかあさんが寺田町のおばあちゃんの家に行くと、おばあちゃんはわざわざ土瓶でせんじグスリを煮出し始めたりする。

おとうさんもおかあさんもはっきりとは千登世に言ってくれなかったが、昔は二人ともそのおねえさんのおうちのクスリの問屋さんで働いたことがあるようだった。おかあさんはそうでもなかったが、おとうさんはいつもおねえさんの下手に出て、ときにはケライのようなものの言い方をした。おかあさんはおねえさんのことをいつもおねえさんと呼んでいたが、おとうさんはおじょうさんと呼んでい

た。はじめはどちらも、山下さんのおねえさんと山下さんのおじょうさんだった。それがいつのまにか山下さんが落ちて、ただのおねえさん、おじょうさんになっていた。おねえさんはおとうさんのことを木村さんとずっと呼んで来ていた。おかあさんを呼ぶときも、木村さんだ。

おねえさんのおとうさんとおかあさんが千登世のおとうさんとおかあさんをどう呼んでいるのか、千登世は知っていた。姫路から二人がやって来たときに、二人が木村はん、おかねはんというぐあいに呼んでいるのを千登世は聞いていたことがあるのだ。その日はおとうさんもおかあさんもなんだかそれこそおねえさんのおとうさんたちのケライになったような気がしていやだった。その気持のせいかいつもはやさしいおねえさんまでがいばっているように見えていやだった。おかあさんはまるで女中さんのように忙しく二階の二人がおとうさんとおねえさんとしゃべっているおねえさんの部屋までお茶を運んだり出前のおスシを運んだりした。一度おかあさんに挨拶に連れて行かれたときに見ると、おとうさんはこのまえ健太郎の受持の先生が来たときのようにまるでわるいことをしたみたいに二人のまえにかしこまっていた。千登世がおかあさんに言われた通り「コンニチハ」と言ってペコリと頭を下げると、二人は頭を下げてから、おねえさんのおとうさんは「木村はん、いいお子や」と言い、おねえさんのおかあさんはおかあさんに「おかねさん、いいお子やね」とそれぞれ同じことばを口に出して言った。

四

おねえさんは背が高い上に脚が長くて、よく外人はんみたいやと言われていた。おねえさん自身も

そんなことを言って、「うち困るわ」とマユをひそめてみせたが、声は逆にうれしそうだった。色が白くて鼻が高い上に、眼も二重マブタで、マツ毛がまるでつけマツ毛をしたように長くてきれいに生えそろっていた。外人はんみたいかどうか千登世にははっきりしなかったが、お誕生日におばあちゃんからもらった西洋人形みたいだと思っていた。「おねえさんはべっぴんさんやな」と、千登世はときどき自分のべっぴんぶりをたしかめるように、自分の部屋で小さな姫鏡台の鏡をのぞき込んでいるおねえさんのそばまで行って、耳もとで言った。そんなとききまっておねえさんはちょっとはずかしそうに笑ったが、「そやけどチイちゃんもべっぴんさんになりはる。これはまちがいなし」と照れかくしするようにびっくりするほどの大声を出して言った。ほんとうは千登世はおねえさんにその大声を出してもらいたくて、おねえさんの部屋にまで行くのかも知れなかった。おねえさんの留守のときでもときどき千登世はおねえさんの部屋に入り込んで、姫鏡台の鏡に自分の顔をうつしてみながらおねえさんの口真似をした。自分がおねえさんに言うせりふは心のなかで言ったことにしておいて、千登世は「そやけど、チイちゃんもべっぴんさんになりはる。これはまちがいなし」とおねえさんのぶんだけ自分で言った。一度だけだったが、千登世はそんなふうにおねえさんの部屋にしのび込みながら、姫鏡台の外に出ていた口紅をおねえさんの真似をして唇につけてみたことがあった。うまくつかなくて口紅は唇の外にかなり大きくはみ出してしまったが、千登世は十分満足しておねえさんが姫鏡台のまえでときどきやっているように頬に軽く両掌をあてながら微笑した。するとほんとうにもうひとりのおねえさんが鏡のなかに立ちあらわれて来た。そのもうひとりのおねえさんはほんとうにおねえさんのような顔でおませに笑っていた。

おねえさんは夜おそくまでよく勉強した。八時になるとおかあさんにフトンのなかに追い立てられる千登世は何時におねえさんが眠るのか知らなかったが、おかあさんの話ではおねえさんはほんとうに夜おそくまで勉強しているらしかった。日曜日でも、これは千登世が自分で見かけたことだったが、机にうつ伏せになるようにして本を読んだり、しきりに何かノートに書き込んでいる。ときにはよほど勉強で疲れたのか、そのままの姿勢で居眠りしているときもあった。「健太郎もあの人みたいに勉強せんとあきませんで」とおかあさんは学校の成績の一向にふるわない千登世の兄にむかって言ったが、それでいて「あの人みたいに夜おそうまで勉強してはったら電気代かさみますがな」とおとうさんに小言を言うときもあった。「べっぴんさんでその上頭がよいのやから、あの人、言うことあらしませんやないか」とうらやましそうな口のきき方をするときもあったが、おかあさんの話はあとはきまって、「ああいうお人はな、男が位負けしてしまうものやから、いいおムコさんを見つけるのがむつかしまっせ」というふうに進んだ。

けれども、おねえさんは姫路一を誇る薬問屋のおじょうさんや、おムコさんのきてを探すのに不自由はない。そんなふうにおかあさんが怒ったように言うときもあった。

千登世がこのごろおねえさんがおヨメさんに行くときのことを考えるのは、近くの文具屋のいちばん上の娘さんがおヨメさんに行ったからだ。そのときの写真を千登世はお隣りのおばさんから見せてもらっていた。あれは何んと言うのか白い四角い布切れで頭のまわりをおおって見慣れない髪のかたちをしてきれいな着物を着た彼女は、いつものアッパッパを着て浮かぬ顔で店番している彼女とちがって、まるっきり別人のようにきれいに見えた。その文具屋の娘さんでもあんなにきれいに見えた

のだから、おねえさんならおヨメさんに行くときにはとびきりきれいになるにちがいない。いつのまにか千登世の心のなかに頭のまわりを白い四角い布切れでおおった顔が浮かび上って見えるようになって来ていた。

「おねえさん、いつおヨメさんに行きはるの。」

千登世が訊ねると、

「さあ、いつかしらね。」

おねえさんはいつも笑いながら応じたが、おねえさんの声はいつもとちがって上ずって聞こえた。

「まず、おムコさんを見つけないとね。」

おねえさんの顔はほんのりと赤くなっていた。

五

千登世の「木村薬局」から北へ少し行って右へ折れると、そこが市電の通る大通りの電車道だった。角のところにパン屋があってフランス屋という名前だが、おひるどきになると、そこではほかほか湯気の立つアンパンやクリームパンを箱に山盛りに積み上げて売った。電車道を横切って低いくろずんだ屋並みのなかに少し入ったところにある幼稚園から千登世が帰って来るのはちょうどおひるどきで、千登世がフランス屋の店のまえをいつも駆けるように足早に通り過ぎたのは、焼きたてのパンの香ばしい匂いが店のまえいっぱいに立ちこめていたからだ。ときどきは「子供は御飯をちゃんと食べんとちゃんと育てしません」と口癖のように言うおかあさんも、フランス屋で千登世の好きなクリームパ

ンを買ってくれたが、毎日のことではなかった。足早にフランス屋のまえを通り過ぎても、パンのおいしそうな匂いはまるで千登世の背中にはりついたようにいつまでも追いかけて来た。

フランス屋のまえで市電の通る電車道の大通りは大きくカーブを描いてほとんど直角に曲っていて、アメ色に車体をぬった市電はそこを通るとき、ギィーと大きな音をたててカーブを曲って行った。その金物（かなもの）がきしむような音はどうかすると千登世の家までとどいて、冬の夜のしずかなときなど、寝つきがわるくてみんなどこかへ行ってしまってひとり闇のなかに取り残されたような心細さを感じながらじっと耳を澄ませている千登世の耳に、ひときわはっきりと聞こえて来た。それは地の底からでもひびいて来るようなふしぎにさびしげでいっそう心細さを増させる音だったが、それでもまだその音が聞こえているあいだは世の中のどこかはおきている気がして千登世は安心もしていた。それがさらに夜が更けて音が次第に間遠（まどお）になるとともにどこからか夜泣きうどんの笛の音が聞こえて来るころになると、もうほんとうに世の中すべてが千登世ひとりをおいて眠りにつき始めていて、闇のなかで眠ろうと必死にもがいているのはもはや千登世ひとりになっていた。幸いなことにそのあたりで千登世の意識もモーローとして来、やがてそれまで眠れなかったのがふしぎなくらいの深い眠りに入って朝までいつもぐっすりと眠るのだが、ただ、そのギィーという市電の音に始まる、ときには何時間かの長さに及んでいるにちがいない暗やみのなかでの体験は、そのときの心細さといっしょに昼日なかにみんなと遊んでいるときにもよみがえって来た。そんなときにはふっと千登世は黙り込んでしまったりしているにちがいない。「おまえ、どうしたんや」ときまって案じ顔に声をかけて来るのは正次だった。「どうもせえへんで、うち」と千登世は慌てて何気ないふうに答えてから、「あんた、昨夜（よんべ）はおシッ

コしはれへんかったんか」といつも悪態をついた。「おまえはほんまにいけずやな」と健太郎はたしなめるように言うときもあったし、面白そうに二人のやりとりを眺めているときもあった。

千登世が夜寝つきがわるくて、ギィーというカーブを曲る市電の音に暗やみのなかで耳を澄ましていることをおねえさんは知っているのだと、千登世は自分では思っていた。べつにおねえさんにしゃべってたしかめてみたことはなかったが、それはふしぎにたしかなことのように思えた。そう思うと、闇のなかでギィーと地の底からでもひびきわたって来るようなものさびしげな音に耳を澄ましながらでも少しは元気が出て、午後天王寺はんの亀の池のそばでみんなして鬼ごっこをして遊んだときのことなどを落ちついた気持で思い返してみることができた。

六

亀の池のあたりは千登世たちのかっこうな遊び場になっていた。二日に一度ほどは親分格の健太郎に引き連れられるようにして、千登世は正次と妹の良子といっしょに家の近くの東門から天王寺はんのだだっ広い境内に入って亀の池まで行った。ときには近所の子供でほかについて来るのもいる。そういう子供には千登世は「うちがゴクラクからゲンセイに出て来た池へ行くんやで」と念を押した。たいていがことばの意味が判らないでキョトンとしていたが、千登世はかまわず言った。千登世の家には赤ちゃんがひとりいて、それは去年の夏生まれたばかりで這い這いするのがやっとの文雄だが、千登世が「赤ちゃんな、天王寺はんの亀の池へ行って来るで」と言うと、いつでもきまってふっと笑顔になってついて行きたそうな身ぶりをした。「来年になったらな、うちがゲンセイに出て来たとこ

を見せてあげる。」千登世はいつもそう言い残してからみんなのあとを追った。

亀の池はまんなかにかかった大きな石組みの橋で、まえのお堂にむかって左右ふた手に分かれていた。石組みの橋の上には橋いっぱいに石舞台がのっていて、そこでは何かの儀式のときにギガクをやる。千登世はまだ実物を見物したことはなかったが、鬼のようなお面をかぶった男が何人か大ぎょうな身ぶりで足をあげたり手を動かしている写真なら見たことがあった。亀の池には土色の甲羅をもった小さな亀がたくさん住んでいて、まわりの柵にもたれてミドリがかった泥色の水の面をじっとみつめていると、なかに亀がいくつも泳いでいるのが見えた。左右ふた手に分かれた池にはどちらにもまんなかに石を組み上げてつくった岩山が氷山のように突き出ていて、そこは亀の日なたぼっこの場所だった。いつも亀が気色がわるいほど重なり合いながらむらがって甲羅を干していたが、甲羅は岩山の石と変らぬ色をしていたからちょっと見ただけでは亀と石の見分けはつかない。何かの拍子に岩山が動き出したかと思うと、そのまま岩山のてっぺんのあたりが亀になった。何度見ても、そのさまは気味がわるくて、気が強いくせに人一倍こわがりの千登世はそんなとき健太郎に黙ってすがりついた。

千登世たちの遊びの順番はきまっていた。まず亀の池のまわりの手すりにもたれて岩山の上の亀の数の当てっこをやってから、そのあたりで鬼ごっこや隠れんぼをする。ときにはお坊さんに叱られながらまえのお堂の廻廊にまで上って遊んだ。廻廊には、はしっこに笑っているのかそれとも眼をむき出して怒っているのかよく判らぬ木像のおびんずるさんがひとり取り残されたように坐っていて、千登世は隠れんぼのときにはよく木像の背後にまわり込んで隠れた。おびんずるさんのあたりから、亀の池のずっとむこうに古びた五重塔がお堂のつらなりの背後にぽつねんと立っているのがよく見えた。

古い五重塔で、おばあちゃんの話では建てられてからもう千年もの年月が経っているということだったが、あれは頑丈な塔で、どんな嵐が来ても倒れたことがないと五重塔の話をするたびにおばあちゃんはそれだけいつも念を押すように言った。おびんずるさんの横手に立って、眼を細く閉じると、五重塔が薄暗い活動写真の場面でも見ているように色を失って黒くうすぼんやりと浮かび上って見える。千登世はその影絵のような光景を見るのが好きで、鬼ごっこや隠れんぼでつかまったあと、おびんずるさんの横で必ずそんなふうにして五重塔を見た。

亀の池のそばから石段を少し下りると、経木を流す亀の井戸のあるお堂だった。いつも線香の煙の絶えたことのないお堂に入ると、まんなかに大きく石で囲った底の浅い井戸があるのが見えて、それが経木を流す井戸だった。井戸の底に大きな石の亀がうずくまっていて、口から水を噴き出している。ゴクラクから来るありがたいお水で、亀の口に経木をあててありがたいお水で濡らしてから井戸の底に流すのだ。お堂にはおじいさんがいつもひとりいて、お詣りの人が持って来た経木を何枚も長い柄のついたヒシャクに入れて濡らして行くのだが、千登世たちは井戸のまわりを取りまくお詣りの人の列にもぐり込むようにして入りながら、ヒシャクの経木が濡れて行くのを何かふしぎな芸当でも見るように息をこらして見ていた。

そこまでは神妙だったが、ときどき健太郎は井戸の底に散らばった経木をアゴで指しながら、「あの経木、あと、おっさん、どうしよるか知ってるか。あとですくうてゴミといっしょに焼きよるんや」とまわりの経木を持って来たお詣りの人に聞こえよがしに大声で千登世たちに言った。一度おじいさんが聞きとがめて、「そんなことしまっかいな。焼くのはべつのとこで焼くんや。今日(きょうび)のゴミにはな、

女子(おなご)の汚れたコシマキまで入っているんやで。そんなこと言うたら、おまはん、罰があたってかったいになる」と、愛想よく経木を受け取るいつものおじいさんに似ぬこわい顔でにらみつけて千登世たちを叱りつけた。ことにおじいさんはどうしたわけだったのか千登世をにらみつけていて、「おまはん、かったい言うたら知ってるやろ。おまはん、そうなるで」とにくにくしげに言った。千登世は泣き出していた。

七

健太郎と千登世はふだんは仲よかったが、ときどき喧嘩をした。ついこのあいだも喧嘩をしたばかりだったが、それは千登世がうちもおねえさんのように勉強してヤクセンへ行ってえらくなるのだと言ったからだ。「女なんかえらくなれるもんか」と健太郎はいばった口調でさえぎった。「なれます」と千登世は口をとがらせた。「なれますウ」とくり返したときには、語尾が切り口上に上った。「なられへん」と健太郎は千登世のまえに立ちはだかるように立ってつづけた。

「えらいさんを見てみイ。みんな男やで。兵隊さんかって男や。バクダン三勇士かって、男や。」

「そやけど……」

と、千登世も負けてはいなかった。とっさにうまい理屈を考え出していた。

「バクダン三勇士かって、あの兵隊はんをな、産みはったんはおかあさんやで、みんな女や。」

「バクダン三勇士」の話は健太郎もしていたし、正次もしたり顔にやってのけた。おとうさんも、「えらいもんやで。三人でバクダン抱えてチャンコロの陣地に飛び込んで行きよってん」と晩御飯のとき

によくしゃべっていた。近所の人も集まってはそんな話をしている。

「バクダン三勇士のおかあさん」の話を持ち出されて健太郎は困った顔をして、助け舟を求めるようにそばにいたおかあさんをふり返ったが、おかあさんは「健ちゃん、チイちゃんに負けたらあかん」と笑いながら言ったきりだった。それでもしばらくして健太郎は「テンノウヘイカかって男や」ととっておきの切り札を出した。千登世は「コウゴウヘイカは女や」とやり返した。しかし、それよりさらにうまい答を千登世はすぐ思いついた。「テンノウヘイカはな、人間やあらしません。神様ですウ」とまた切り口上に語尾を上げながら言った。それはついこのあいだ、千登世がうっかり新聞のテンノウヘイカのおシャシンを踏みつけようとしたときに、いつにないけわしい顔つきでおとうさんが言い出したことだ。「兄ちゃん、学校で先生にそないに習えへんかったん。」学校のことを言い出されるのが苦手な健太郎の弱味を突くように、千登世は意地悪な口のきき方をした。「習うたんやけど、忘れてしもうたんやろ。」とどめを刺すようにそこまで千登世はつづけた。

健太郎は口惜しがって千登世をにらみつけたが、おかあさんがそばにいなかったら、一発このごろ彼がしきりに真似をしてみせているメリケン・パンチを見舞って来たかも知れない。そんなたけだけしい顔をしてにらみつけた。千登世のほうでも、彼のコブシが飛んで来たら、健太郎の胸に武者ぶりついて行ったにちがいない。このあいだも亀の池の亀の数のことで言い争ったときにも、おしまいにはメリケン・パンチをぶちかましに来た健太郎に大声で泣きじゃくりながら武者ぶりついて、健太郎の腕に歯形を残した。そのときには健太郎も痛くて泣き出したのだが、またこのあいだのことのようになると思ったのかも知れない。健太郎は「ほんまにおまえはきつい女子(おなご)やな」と呆れはてたように

言った。「そうやで、うちはきつい女子やで」と千登世は言ってから、「おねえさんかってな、きつい女子や」と自然な言い方でつづけた。その自分のことばで味方がたくさんできたような気になった。

おねえさんにはおにいさんがひとりいると聞いていた。おねえさんのおとうさんのお店の仕事をしている。その話は千登世は母親から聞いていたが、おねえさんもおにいさんにぶたれたりすると、千登世のように大声で泣きじゃくりながら相手に武者ぶりついて行って、腕に歯形を残すぐらいのことはやってのけるにちがいない。このあいだ、健太郎と言い争ったあと、「おねえさんのおにいさんはこわい人？」と千登世はおねえさんに訊ねていた。

突然だしぬけに千登世にそう訊ねられて、おねえさんはびっくりした顔で千登世を見返した。そういうときにはおねえさんの大きな眼はさらに大きく円くなって、細面の顔がかえっていっそう細長く見える。千登世はそんなおねえさんのびっくりしたときの眼をみはるような顔が好きだった。

「ううん、やさしい人。」

おねえさんは笑いながらかぶりをふった。

「ぶたれたこと、あらへん？」

「あらへん。」

おねえさんは笑いつづけながらこともなげに答えたが、千登世はおねえさんのその答に何かひどくがっかりした気持になった。

「おねえさんのおにいさんは兵隊に行きはったことある？」

べつのとき、千登世は訊ねた。それは八百屋の息子が入営してお祝いのたちぶるまいがあった日の

ことだ。夕方、店じまいをした八百屋の店のまえに「祝入営××××君」と大きく書いた旗が大きいのが三本、小さいのが五本立ってお祝いが始まった。一軒おいて隣りの魚屋がもって来た大きな尾頭つきのタイをまんなかにおいて、みんなは顔を赤くしながら夜おそくまで騒いだ。酒くさい息をプンプン吐きながら軍歌を歌う人もいたし、チョウセンにずっといたことがあるという人がチョウセンの歌を歌った。ナニワ節も出たし、あれはどこの踊りなのかピョンピョン跳ねるようにして踊った人もいた。「ほんまににぎやかなこっちゃ。やかましいて、寝られへんがな」とおかあさんは言ったが、根が千登世と同じようににぎやかなことが好きなおかあさんのことだ、口ではそう言いながらべつに怒っているふうでもなかった。「おとうさんがな、入営しはったときはもっと盛大にやってもらいはったらしいで」とそんなこともちょっと自慢げに言った。「健ちゃんのときには旗は何本立つやろ。」千登世は唐突に言った。不意に眼の前に「祝入営　木村健太郎君」とくろぐろと書いた旗が何本も立っているのが見えて来て、それが風でパタパタといっせいにはためいたような気がしたのだ。「え？」と母親はけげんな顔で千登世を見たが、すぐ笑い出して、「そやな十本……いや、百本、立ててやりますがな」と眼を細めた。

おねえさんのおにいさんは兵隊に行きはったことあるかという千登世の質問には、おねえさんはちょっと残念そうな顔をしてかぶりをふった。

「おねえさんのおにいさんは近眼やねん。」

おねえさんはいつになく気弱な声を出した。まるで何かわるいことをしてあやまっているみたいだった。

「近眼の人は兵隊さんに行きはれへんの。」
「チョウ兵検査で落ちるんよ。」
千登世はいばった言い方でおねえさんのことばを中途でさえぎった。
「そやで、チョウ兵検査はむつかしいんやで。」
千登世は自慢げにつづけた。
「うちのおとうはんな、えらいんやで。チョウ兵検査に通って兵隊さんになりはったんや。」
「そうね、えらいわね。」
おねえさんは笑いながらうなずいた。

八

肩に三つ星がついた肩章をのせた軍服姿のおとうさんの写真を千登世はこのあいだおかあさんから見せてもらったばかりだった。「見てみイ。うちのおとうはん、こんないばった顔をしはって」とおかあさんは機嫌よく面白そうに笑ったが、どこかの写真館で撮ってもらったらしいセピア色のすでにかなり色あせた写真のおとうさんは、たしかにいつもの腰が低くてじょさいのないおとうさんとは人が変ったようにいかめしい顔つきのおとうさんだった。その顔つきで椅子にきちんと腰をかけている。「おとうはんな、ただのジョウトウヘイやのに、まるでこれタイイはんみたいな顔してはる」とおかあさんは機嫌のよい笑いをつづけながら、写真のおとうさんを指でポンと弾いた。
健太郎も大きくなったら兵隊さんになるのだといつも口癖のように言っていた。兵隊さんになって

罪のないニホン人を殺しに来るチャンコロをやっつける。チャンコロはあちこちで罪のないニホン人を襲撃して来て、鉄道を破壊する。しかも、こちらが出て行くと、うまいこと逃げて姿を隠す卑怯者たちだが、このごろではチャンコロは同じシナ人まで殺したり、襲撃して財産を奪ったりしていた。「そんなチャンコロのヒゾクはな、ほんまは腰抜けやねん。弱いもんには強いが、強いもんには弱いねん。こっちが突っ込んで行ったらみんな逃げよるで。」

健太郎はまるで自分の眼のまえにチャンコロのかたわれがいるようにこわい顔をしながら、鉄砲を手に持って攻めて行くかっこうをした。正次も兵隊さんの真似をしたが、健太郎にくらべると下手だった。亀の池のまわりでも近所の男の子が二、三人いっしょに来たときには戦争ごっこをしたが、正次はぐずの兵隊さんで通っていて隊長の健太郎に叱られてばかりいた。走ってもすぐこけて泣き出すし、ちょっとした高みから飛び降りるのもこわがって、「おまえ、それでも男か」とみんなはよく笑い物にして、「ショウジ、ショウジ、キンタマアラヘンショウジ」と千登世にはよく判らないことばではやしたてた。千登世も良子も、判らないままで声をはりあげた。

日本の兵隊さんはやさしいので、ヒゾクが襲いかかって来たときにはチャンコロでも一生懸命たたかって護ってやる。そのヒゾクとのいくさのなかで戦死する人までがいる。「長五郎はんのとこがそうやで」と健太郎はおごそかな顔つきで言った。「長五郎はんの息子はんのイコツが還って来たやろ。あれがそうや」と健太郎はしたり顔でつづけた。

長五郎はんは千登世の家のつい近くの豆腐屋で、そこから母親はいつも豆腐と千登世の大好きな厚揚げを買っていたが、冷たい水をしょっちゅう扱っているせいか掌にヒビ割れをいちめんにこしらえ

た小柄な白髪のおじいさんを、おかあさんはどういうわけからか長五郎はんと心やすだてに呼んでいた。おかあさんにならって千登世たち子供も自分たちのおじいさんほどの年のおじいさんをそんなふうに呼んでいたが、戦死したのは近くの町工場に勤めに出ていた長五郎はんの二番目の息子さんで、昨年の暮れ近くイコツは還って来た。

そのときには健太郎も千登世も町内の子供はみんな長五郎はんの店のまえに並んでイコツの帰還を待ち受けたのだが、年の暮れ近い日の朝がたの冷え冷えとした空気のなかで千登世がからだをちぢこませるようにして母親と健太郎と並んで立っていると、黒い枠のなかに入れた息子の写真を持った長五郎はんを先頭にした一団がようやく大通りのほうからしずしずと道をこちらに入って来るのが見えた。

おどろいたのは、長五郎はんはいつものゴムの前だれをつけた着物姿の長五郎はんではなかったことだ。彼が着ているのは軍服だとはすぐ判ったが、街で見かける兵隊さんが着ている、セピア色の写真のなかでおとうさんが着ていたカーキ色の軍服ではなくて、絵本のなかでしか千登世が見たことのない、それこそ白ヒゲのやさしいノギ将軍が身に着けていたような胸に十字のカギをいくつもつけた黒い軍服を着ていた。健太郎は「あれはな、ニチロ戦争のときの兵隊さんの服やで」と千登世の耳に口を押しつけて来てすばやく千登世の知らないことを教えてくれたが、その軍服のせいもあってか長五郎はんはいつもの長五郎はんとはまるっきりちがって見えた。堅い箱の感じのする軍帽をまぶかにかぶった下からのぞく顔も、「チイちゃん、うちの厚揚げはうまいで」と笑いかけるいつもの顔とはちがってひきしまって険しいものになっていて、「長五郎はん」と心やすだてに千登世が呼ぼうものなら、こっぴどく叱りとばされそうだった。千登世はこわくなった。

人が変ったように見えているのは長五郎はんだけではなかった。首から白い布で下げたイコツの箱を捧げもって千登世たちのほうに歩いて来るおヨメさんも今にも泣き出しそうな顔をしていて、店でときどき千登世の頬っぺたを指で突っついたりしてからかいに来るおヨメさんではなかったし、おヨメさんのすぐあとにつづく、これは千登世にもおなじみのカーキ色の軍服を着て長五郎はん同様にいかめしい顔つきで歩く男はフランス屋の隣りの煙草屋の店主だった。軍服姿はもう二人、千登世の知らない人がつづいてあとは黒いモンツキを着た男の列だったが、なかにおとうさんが混じっていた。ふしぎにホッとして千登世は思わず「おとうはん」と小声で叫び出そうとしたのだが、その声が喉にひっかかったように出なかったのは、あたりにふしぎに重苦しい空気がたち込めていたからだった。とたんに「サイケイレイ」と号令がかかっていた。そう号令をかけられたら腰を折ってふかぶかと礼をするように昨日の夜おかあさんに教えられて千登世は何度も練習をしていたのだが、ぎごちなくピョコリと頭を下げる千登世の動作が面白いと言ってみんなして笑っていた、そのときのなごやかな感じはもうあたりにはなかった。重苦しい空気のなかにピンピンとはりつめているものがあって、そのはりつめたものに押さえ込まれるようにして千登世は慌てて頭を下げた。昨夜のようにぎごちない下げ方だったにちがいないが、昨日の夜は大笑いをしていたおかあさんも健太郎も笑わなかった。千登世と並んで、二人とも懸命に頭を下げていた。

九

千登世ははじめ戦死がいくさの場で人が死ぬことだとは知らなかった。健太郎が隊長となってやる

戦争ごっこのなかの「メイヨノセンシ」と同じようなものだと思っていたのだ。

戦争ごっこは天王寺はんの境内でもときたまはやったが、それよりは千登世の家のつい近くの広場でするほうが多かった。そのほうが兵隊さんになる近所の男の子を集めやすかったからだが、千登世たち女の子は、そのときにはのけ者にされたように広場の片隅で鉄砲や刀に見たてた棒ぎれをもって駆けまわる子たちを眺めた。それでもときどき健太郎が「おい、おまえら、カンゴ婦になれ」と言って来るときもあった。そう言われたときには男の子たちにくっつくようにして千登世たちも懸命に駆けた。

広場には横手の町工場が捨てたつもりなのかそれともそこを置き場にしているのか、レールのように長い赤錆びた鉄材を積み上げた一画があって、そこがチャンコロのヒゾクの陣地だった。その敵陣めがけてみんなは攻めて行くのだが、遊びのかんじんなのはおしまいのトツゲキの部分だった。健太郎がそう大声で号令をかけると、それまで伏せの姿勢でのろのろ進んでいた男の子たちはいっせいに起き上って、そのまま鉄材の山めがけて棒ぎれを振りかざしながら駆け上って行った。最初に鉄材の山の上に立ったのが「イチバンノリ」と大きく叫んで、棒ぎれを頭の上に高く挙げた。たいていは健太郎が「イチバンノリ」をやったが、ときどき下駄屋の息子で健太郎の同級生の豊が「イチバンノリ」になった。そんなとき、健太郎は「ええか、今度はわしや」とほんとうに口惜しそうな顔で自分で自分をなぐさめるような口のきき方をした。「なあ、そやな、チイちゃん。」ときには健太郎は援軍を求めるように千登世を気弱に見た。「そやで、にいちゃん」と千登世はやさしい声を出して言ってやった。「今度はにいちゃんや。」千登世は自分がまるで健太郎より年上のおねえさんになったような気になった。

ぐずでのろまの正次は一度も「イチバンノリ」になったことがなかった。それどころかたいていはべったで、千登世と同じ年のうどん屋の下の子にも負けることもあった。そのうち正次はうまい術を見つけ出していた。べったになりそうになると、「メイヨノセンシ」とひと声大きく叫んで棒ぎれを胸に抱きしめながら地べたにそのままへたり込んだ。仰向けにころがってみせるときもあった。困るのは、正次が「メイヨノセンシ」を始め出すと、「イチバンノリ」をやりかけたのまで鉄材の山からもう一度駆け下りて来て同じように「メイヨノセンシ」を始めたりして、みんなが倒れてしまうことだった。健太郎は「こんなんやってたら、チャンコロのヒゾクが勝つぞ」と怒ったが、正次は笑って相手にならない。「キュッ、バタン、コロリ」とおどけることが好きな下駄屋の息子の豊が、そんなときには正次に加勢するように大声を出しながらおどけてもう一度地べたにころがってみせた。「メイヨノセンシをするときにはええか、テンノウヘイカバンザイと言うんや。おまえら、死ぬんやないか。死ぬときには日本の兵隊さんはな、ヒゾクなんかとちごうて、テンノウヘイカバンザイ言うて死ぬんや」と怒った声でつづけたが、正次も豊も健太郎のことばがまるっきり耳に入っていないように仰向けのからだで手足をバタバタさせながら笑ってふざけつづけた。「おまえら、何やっているんや。おまえら、もう死んだんやないか。死んだら、からだ動けへんのや。」健太郎は懸命に言いつづけた。

そんなとき、はじめいっしょになって笑っていた千登世がおびえたように黙り込むようになったのは、世話好きの散髪屋のイグチさんに連れられて近所の子供みんなで浜寺の海水浴場に海水浴に行ったときに、今海から引き揚げられたばかりのデキシニンを見てからだった。中学生だというその人の顔は全体が蒼白かったが、円刈りの頭だけは逆に蒼ぐろく見えた。

みんなから離れて健太郎と砂浜を歩いているときに人だかりしているのに出会って、二人で人垣のなかに潜り込んだのと同時にうしろからぐいと押されて出たのが砂浜に寝かされているデキシニンのまえだった。そのあとすぐタンカをかついだ巡査二人が駆けつけて来て死体は持ち去られたからほんのわずかな時間のあいだのことだったが、とっさに見た死体の顔の蒼白さと頭の蒼ぐろさのとりあわせは、そのとき巡査のどちらかが口に出したデキシニンという耳慣れないことばのひびきといっしょにいつまでも千登世の心に残った。

「あの子な、おぼれ死にしはったんや」と死体が持ち去られてから、健太郎は千登世にあらためて言うようにつぶやいた。「ウン、ウン」と千登世はいつものように（そんなことぐらい判っている）とでも言うふうに力んでうなずいたが、何かひどくこわくてからだがふるえた。砂浜でお弁当をひろげているみんなのところに帰ってから、二人はもうデキシニンのことは何も言わなかった。健太郎も千登世も黙って朝がた母親がつくってくれたお弁当を食べた。お弁当には昨夜ねだった通り千登世の好きなコロッケも入っていたが、いつものようにおいしくはなかった。

それからは千登世は「メイヨノセンシ」がこわくなった。このごろは健太郎たちは戦争ごっこのなかで「バクダン三勇士」をやり始めていたが、「バクダン三勇士」の遊びのおしまいはきまって「メイヨノセンシ」だった。豊がどこからか見つけて来た天ビン棒ほどに長い棒ぎれを健太郎、正次、豊の順で三人で持って、健太郎の「トツゲキ」の号令一下、鉄材の山の敵陣めがけて駆け上って行くのだが、山の上で三人はいつも棒ぎれごとバタリと倒れて「メイヨノセンシ」を遂げた。もちろん、そのときには三人声をあわせて「テンノウヘイカバンザイ」を叫んでいる。「バクダン三勇士」のときは、

いつも口やかましく正次と豊を叱りつけている健太郎がいっしょに棒ぎれを持っているせいか、正次も豊もふざけなかった。三人とも真面目な顔つきで倒れ、「テンノウヘイカバンザイ」を叫んだ。

三人とも円刈り頭だったから、余計あの「デキシニン」の中学生のことが思い出されるのかも知れない。実際、棒ぎれを握りしめたまま倒れて「テンノウヘイカバンザイ」を叫ぶ三人の円刈り頭を見ていると、千登世の眼に「デキシニン」の中学生の蒼ぐろい円刈り頭と蒼白い顔とが二重写しするようにあざやかに見えて来た。（こわいことあらへん、こわいことあらへん）と千登世は心のなかで懸命に自分にくり返した。

十

パン屋のフランス屋からさきにもう少し電車道を歩いて行くと、交番のまえに出た。サーベルを腰に下げたお巡りさんがいかめしい顔つきで坐っていて、千登世はまえを通るときいつも何か空おそろしくなって心のなかでお得意の（こわいことあらへん、こわいことあらへん）を連発しながら通り過ぎるのだが、いつも足は自然に速くなっていた。おかあさんやおねえさんといっしょのときでも、千登世は息を弾ませていて、おかあさんは気づかなかったがおねえさんは眼ざとく千登世の顔色の変化を読みとっていて、「何もわるいことしていないんやから巡査なんかこわいことないんよ」と千登世に教えるように言った。千登世は口をとがらせたが、おねえさんは「そんなおどおどした顔していたら、それこそわるいことして手がうしろにまわる人とまちがわれる」と、さらに千登世の気に障るようなことをズケズケ言った。

交番のまえで千登世がこわくなっていつも自然にからだがこわばって来るのは、お巡りさんが泥棒をしょっぴいて来るのを見たからだった。着物をだらしなく着流しにしたおとうさんぐらいの年の男で若いお巡りさんに引きずられるように交番に連れて行かれるのを見たのだが、男はいつか健太郎が教えてくれた通りテジョウをかけられていた。男の顔は捕まえられるときにお巡りさんに殴られでもしたのか、額に血と泥がついていてそれだけで陰惨な感じがした。二度目にしょっぴいて行かれる人を見たのは、健太郎と日曜のお昼に歩いているときだったが、健太郎の話では泥棒ではなかった。制服、制帽のセンモン学校の学生だったが、「あれはナンパで捕まりよってん。昼日なかから、カフエに入れてもろうて酒のんでいよってんや」と健太郎はいつものわけ知り顔で言った。たしかにしょっぴいて行かれた学生は恥ずかしいのか、それともほんとうに昼日なかからお酒を飲んでいたのか真赤な顔をしていた。「あいつの帽子、見てみイ、ピカピカ黒光りしているやろ。あれはな、靴ズミ塗って光らせよるねん。あれがな、ナンパのしるしや。」健太郎は得意げにつづけた。

カフエは交番からさらに電車道を進んで大きな四つ角に来たところの角にあった。もうひとつおむかいの角にあるのが球つき屋で、球つき屋が何をするところか千登世は窓からのぞいて知っていたが、カフエのほうは入口に赤いのやら黄色いのやら豆電球がついて夜になるときれいにそれが光るのは知っていても、なかは暗くてよく見えないので、どんなところなのか見当もつかなかった。それでも何かよからぬところだとはうすうす感じていて、何ごとでも得心の行くまで訊ねるたちでおかあさんやおねえさんを悩ます千登世も訊ねようとしなかった。千登世が夜になってカフエのまえを通りかかったのは一度きりだった。それはおかあさんとおばあちゃんの家に行っていておそく帰って来たと

きだったが、そのとき千登世は入口の豆電球が色とりどりにきれいに点滅するのをはじめて見た。（あ、きれい）と思ったとたんに酔っぱらいがよろけるように出て来たかと思うと、そのあとすぐ顔を真白に塗った女が飛び出て来るように出て来て「ねえ、あんた、また来てよ」とかん高い声で叫びながら酔っぱらいの背中を乱暴な勢いで叩いた。おかあさんは黙っていたが、それが見てはならないものだとはおかあさんがすぐ足を速めたことで千登世には判って、（あれ、何やのん）といういつもの口癖を口のなかで押さえ込んだ。

交番でいつも顔を見かけるのは、ときどき千登世の家にもやって来る千登世のおとうさんほどの年のお巡りさんだった。腰のサーベルをこれ見よがしにひきずりながら店に入って来て世間話をして行ったりしたが、健太郎は「あんなただのお巡りさんより兵隊さんのほうがえらいんやで」とかげ口をきいた。それでもその糸井はんという名前のお巡りさんがやって来ると、おとうさんは「糸井はん、糸井はん」とお愛想笑いをした。

糸井はんが真赤になって千登世の店のまえの通りを駆けて行ったことがあった。ダダッと乱暴に靴音がして店の片隅の椅子の上に坐って絵本を見ていた千登世がおどろいて外に出ると、通りを懸命に駆けて行く糸井はんの肥ったうしろ姿が見えた。しばらくすると糸井はんは息を弾ませながら千登世の店にまで帰って来て、「あいつ、うまいこと逃げよった。まだ若い学生みたいなやつやったけど、あの工場のまえでな、あいつ、太いやつやで……」とおとうさんにコップの水を一杯もらいながら、健太郎たちが戦争ごっこをする空地のむこうの工場のことを口に出した。「ビラをな、撒こうとしよったんや。」「シュギシャでっか」とおとうさんは声をひそめたが、糸井はんはまだいくぶん赤味が残っ

た顔で「えらい、すまんかったな」とコップをおとうさんに突き返すように返すと、そのまままたサーベルの音をさせて外へ出て行った。

白い見慣れぬ服を着たおじいさんが交番のまえで糸井はんにどなりつけられているのを見たのは、それから四、五日ほどしてからのことだった。おじいさんの服はほんとうに見慣れない白い上っぱりのような服で、いったん足早に通り過ぎようとした千登世が足をとめたのはその見慣れぬ服のせいだったにちがいない。あとでその服の話をすると、健太郎と正次が「ああ、それはチョウセンの着物やで」と声をそろえて言った。そのあとすぐ「そのおじいさん、くさかったやろ」とわけ知り顔に言ったのは健太郎だったが、「あいつら、ぼくらニホン人とちごうて、ニンニク食いよるからな」と横から口を出したのは正次だった。そう言ってから正次は「チョウセン、チョウセン、クチャイナ、クチャイナ」と突然叫び出して、鼻をつまんだ。健太郎も負けないで「チョウセン、チョウセンイウテパカニスナ……」とことばに奇妙な抑揚をつけて叫び出したが、途中で正次も加わった。何度か二人はゲラゲラ笑いながら声をそろえて叫んだ。

ひとしきり笑って笑い声が鎮まったところで、「そのおじいさん、糸井はんにやっつけられて、アイゴー、アイゴー言って泣いとったやろ」と健太郎はいばった顔で言ったが、千登世がおぼえているかぎり、おじいさんは泣いてなどいなかった。糸井はんがどなりつけているまえでおじいさんはべつにうなだれもしないで立っていた。おじいさんになるとたいてい腰が曲って来るはずなのに、そのおじいさんはアゴヒゲのみごとな白さとシワがいちめんに刻み込まれた顔つきからいって相当な年のおじいさんだったが、ニホンのおじいさんとちがってチョウセンのおじいさんだったからかも知れない、

腰も曲っていなければ背中もまっすぐに立っていた。

千登世がおじいさんは泣いてなどいなかったと言うと、「そいつ、チョウセンやから、ニホン語よう判らへんかったんや」と健太郎はまたいばった顔で言った。それからまた「ポクハチョウセンテスネン」と奇妙な抑揚をつけて言って笑った。「ソウテスネン」と正次があとをつづけて、同じように大声で笑った。

つづきは製品版でお読みください。